

2 学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育む授業づくりの実際

「ワン・ツー・フライト！ ～走・跳の運動～」(第3学年)

(1) 育成したい「思考力」と学びに熱中する子どもの姿

【単元で育成したい「思考力」】

より遠くへ跳ぶために、自己の課題に応じた練習を選択する力

短い助走での幅跳びで、遠くへ跳ぶことに興味をもち、アドバイスし合いながら、友達のよい動き方を自分の動きに取り入れて、繰り返し練習に取り組む。

【学びに熱中する子どもの姿】

本単元では、4段の跳び箱の上から3歩助走の走り幅跳びを行った。このような跳の運動は、助走、踏み切り、空中姿勢、着地の局面において、より遠くへ跳ぶためのよい動き方を身につけていくことが大切である。本実践で子どもたちは、モデルとなる友達のよい動き方と自分の動き方とを比較することによって、自己の課題を捉え、その課題解決に必要な練習を選んでいった。例えば、「僕は〇〇君のように、空中で『くの字』になっていないから、そこが課題だね。膝を胸に引きつけて跳ぶ練習をしよう。」「私は、手を前の方に振り出せていないよ。ステージの上から、腕を前に振り出す練習をしよう。」等と、自己の課題に応じた練習を選択していったのである。

また、子どもたちは、「3歩の助走でどこまで遠くへ跳べるかな。」と短い助走での走り幅跳びという運動に興味をもち、「どうすれば遠くへ跳ぶことができるのかな。」等と遠くへ跳ぶための課題を解決していきたいという意欲を高めていった。練習の際、子どもたちは、「僕が跳ぶから、頭の高さを見て、斜め上に跳んでいるか教えてね。」とアドバイスを求めたり、「もう少し着地まで膝を胸に付けるようにして跳んだら、〇〇君みたいに距離が伸びるよ。」等と、アドバイスしたりしていった。そのアドバイスを基にして、自分の動きの質を高めていったのである。このような活動を通して、「もう少しでできそうだから、もう一回チャレンジしよう。」「この練習を繰り返せば、必ず記録が伸びるはずだ。」等と、自分の課題に応じた練習を選択しながら何度も取り組もうとする子どもの姿が見られた。

(2) 子どもの意識の流れを大切にした単元構成について

学習意欲に関わる子どもたちの実態 (35名)	学習意欲を育てる単元構成の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・質問紙調査の結果から、走力や跳力等を他者と比較されることによって劣等感を感じやすい子どもが35名中8名がいた。 ・日常の観察により、競い合うことに向けて意欲的に練習に取り組める運動有能感の高い子どもと、単元が進むにつれて自信を失い、学習意欲が低下してしまうことが想定される運動有能感の低い子どもがいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人ではなく、チームで競い合うようにした。チーム編成の際には、1時間目に測定した3歩助走の走り幅跳びの記録と50m走のタイム、立ち幅跳びの記録を基に、3歩助走の走り幅跳びの期待値を算出し、どのチームも期待値がほぼ等しくなるようにした。 ・競い合う場(チーム戦)を単元内に3回位置づけることで、課題解決を繰り返し経験できるようにした。
<ul style="list-style-type: none"> ・Q-Uの結果と日常の様子から、本学級には、友達と活動することが楽しいと感じている子どもが多い一方、4名は友達が励ましてくれないと感じていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を通して親和的な雰囲気話し合えるチーム編成をし、互いに励まし合う活動を繰り返し行った。

(3) 子どもの意識の流れと学習意欲への働きかけ (総時数 7時間)

次	主な子どもの意識	学習意欲への働きかけ
第一	<p>①</p> <p>いろいろな高さから3歩助走で跳んでみよう</p> <p>助走して跳ぶと、立ち幅跳びより遠くに跳べて楽しいね。</p> <p>ステージから跳ぶのは簡単だね。4段の跳び箱で記録を測ろう。</p> <p>遠くへ跳べたと思うよ。あまり遠くへ跳べなかったよ。</p> <p>もっと遠くに跳べるようになりたいな。</p>	<p>① さまざまな高さの場を準備し、走って跳ばせることで、高さによって跳躍の距離が変わることを体験させた【教具：注探求心の喚起】。</p>
第一	<p>②</p> <p>4段の跳び箱でチーム戦をしよう</p> <p>2回目のチーム戦に向けて、もっと遠くに跳べるようになりたいな。</p> <p>遠くに跳ぶためのポイントを、友達の動き方から見つけよう。</p> <p>踏み切りや着地にコツが ありそうだよ。 空中の動きにコツが ありそうだよ。 助走を長くしたらも っと跳べると思う。</p>	<p>①～⑥ 学級目標の「レジェンド」に関連させ、本校卒業生で県大会で1位の記録を残した選手の一連の動きをモデルとして提示し、挑戦意欲を高めた【ゴール達成の見通し：関目的指向性・親しみやすさ】。</p>
第	<p>③</p> <p>助走と着地のコツを見つけよう</p> <p>なかなか上手く踏み切れない。着地で足が前後に開いてしまうよ。</p> <p>1, 2, 3のリズムで跳ぼう。「横綱どっすん」で着地だ。</p> <p>リズムよく踏み切り、「横綱どっすん」で着地するのがコツだね。</p>	<p>①～⑦ 満足した気持ちを赤付箋、もっと挑戦したい気持ちを青付箋で自己評価させて問題を集約し、次時の課題設定に生かしていった【課題設定：関目的指向性】。</p>
二	<p>④</p> <p>4段の跳び箱で2回目のチーム戦をしよう</p> <p>もっと遠くに跳ぶためのコツを見つけたい。</p> <p>もっと斜め上に跳べ るようになりたいな。 空中で膝を曲げて 跳びたい。 手を使って勢いを付け て跳ぶとよさそうだ。</p>	<p>②～⑦ チーム戦の結果は、勝敗だけではなく、チームの記録の伸びも合わせて発表することで、どのチームも達成感を味わえるようにした【結果の提示：満内発的な強化】。</p>
次	<p>⑤本時(5/7)</p> <p>空中の動きのコツを見つけよう</p> <p>ゴム切りの場で、斜め上に跳ぶ練習をしてよう。 ステージから、膝を曲げて、体を「く」の形にして跳ぼう。 手を前に振り出すタイミングを練習しよう。</p> <p>できるようになったら、次の課題に合った練習をしていこう。</p> <p>斜め上に跳べるようになったから、次は「く」の形に近くなってきたよ。ステージの練習を続けよう。 一連の動きを動画で見て、もう一度課題を確認しよう。</p> <p>フワッと跳び出せば、空中の時間が長くなって遠くへ跳べるよ。</p> <p>もう少し、助走の練習が必要だよ。 私は膝を胸に近づけられるようにしたい。 僕は手の動きをもっと練習したいよ。</p>	<p>③～⑥ チームの力を高めるという目的に応じて「サポートペア」「ライバルペア」を選択させた【目的意識のあるペア：関動機的一致】。</p> <p>③～⑥ 各自の連続写真をワークシートに示し、モデルと比較できるようにした【連続写真：注探求心の喚起】。</p>
次	<p>⑥</p> <p>助走と踏み切りの練習をしよう</p> <p>自分に合った練習をして、記録を伸ばそう。</p> <p>次の時間のチーム戦で、自己ベストが出せるように頑張ろう。</p>	<p>— 評価規準 (第2次) —</p> <p>各局面における自己の課題を捉え、それに応じて必要な練習を選択している。</p>
次	<p>⑦</p> <p>4段の跳び箱で3回目のチーム戦をしよう</p> <p>これからも、みんなで高め合って挑戦していこう。助走を長くしたい。</p>	

(4) 学習意欲を育てる働きかけと子どもの姿

① 課題の解決 → 新たな問題を見だし、表出する (5時間目)

前時までに子どもたちは、助走と着地のコツを見つけてきた。前時の終末には、2つの局面に加えて、「空中の動きにもコツがあるのではないか。」と自己評価したことを付箋に記述していた子どもがいた。そこで本時の導入では、その子どもを意図的に指名して「助走や着地だけでなく、空中の動きにもコツがあるのでは。」「空中で体を『くの字』にすればもっと跳べるのでは。」という問いを全体に広げた。その後、「空中の動きにも、コツがありそうかな。」と問いかけ、「空中の動きのコツを見つけよう」という学習課題を設定していった。

チームで空中の動きのコツを見つける際、「斜め上の方向に跳ぶ」「手を前に振り出す」「膝を胸に引きつける」という三つのポイントが浮き彫りになった。その後、テレビに連続写真を映しながら、見つけたポイントと課題解決に向けた練習の確認を行い、解決の見通しをもたせることで、子どもたちが意欲的に練習に取り組んでいけるようにした【ゴール達成の見通し：関目的指向性・親しみやすさ】。



【モデルとなるレジェンドの動き】

三つのポイントと、ワークシートに示されている自分の動きの連続写真とを比較することで、自己の課題を捉えていった。前時に自分が跳んでいる姿を連続写真にし、一人一人のワークシートに示しておくことで、自己の課題を追究したいという意欲を高めた【連続写真：注探求心の喚起】。

子どもの姿

T：レジェンドの動きを連続写真で確認してみよう。着地はどんなってるかな。

C1：かかとから着いてるよ。

T：こういうことを意識して着地したら、記録は伸びそうかな。

C2：はい。(言われる前からワークシートにある自分の連続写真を見て、自己の課題はどの局面かを考えようとしている。)

T：自分の動きはどうなっているか、ワークシートで振り返ってみましょう。

C3：ちょっとだけ似ているんだけど…ここが違うんだ。僕の頭は上にいっていないんだ。(レジェンドの頭を矢印で結ぶ。自分の写真も同様に。)

C4：頭の向きは下にいっているな。手も下に行き過ぎている。「くの字」は少しできている。(自分の写真内の頭の部分を丸で囲む。)



C3, C4の子どもは、板書に示されている三つのポイントのよさを理解して解決の見通しをもってから、ワークシートに示されている自分の連続写真とを比較していくことで、自己の課題を明確に捉えることができた。そして、以下に示すように、課題解決に向けて友達とアドバイスし合いながら、意欲的に練習を行っていったのである。

子どもの姿 (対話場面)

C5：(床に体の形を描きながら)体が「くの字」になっているか、「つの字」になっているか、着地のところで見ていてね。

C6：(C5の跳躍を見た後、連続写真を指差しながら)手はもっと前に出した方がいいよ。足をもっとくっつけるように。

C5：足を前に出して、手で膝をつかむようにするといいのかな。

C6：(自分でやってみせながら)もっと勢いをつけて、こうやって。



C5の子どもは、空中局面に課題があることを捉えており、その動きの改善に向けて、ペアにアドバイスを求めていた。3分の練習時間内に9回の跳躍を行い、絶えず空中局面での体の形を確認しようとする姿が見られた。それにより、体を反ってから「くの字」にすればよいことに気づき、練習に取り入れ

た。その他の子どもたちも同様に、それぞれの課題に応じた場を選択し、動きの質を高めていった。

本時の終末段階で、「最終のチーム戦が迫っていますが、次の時間はどうしますか。」と問いかけた。本時、記録が向上した者も、そうでなかった者も、最終のチーム戦に向けてさらに改善すべきことが残っており、解決したいという気持ちが高まっていた。ふり返りの場面で、青付箋に「もつと斜め上の方向に踏み切れるようになりたい。」と挑戦する気持ちや、赤付箋に「飛び出す方向に気をつけると記録が伸びたよ。次は『くの字』で跳べるようになりたい。」と満足した気持ちを付箋で表出させた。その付箋を、モデルとなるレジェンドの連続写真の上に貼らせ、各自の課題がどの局面にあるのかを分かるようにした【課題設定：関目的指向性】。



【付箋で各自の課題を明らかに】

② 課題の設定 → 課題の解決（5・6時間目）

子どもたちは、レジェンドの連続写真に貼られた付箋を見て、それぞれに課題となる局面が異なっていることに気づき始めていた。しかし、5時間目の最後に、着地が決まらないことで得点が伸びなかったチームが多く、「びたっと着地ができるように練習したい。」という意識の方が高まってきた。それでは跳躍の結果である着地に意識が向いてしまい、本時で学ぶべき内容である助走から空中局面の動きの質を高めるということに向かうための意欲が高まりにくくなることが想定された。そこで、着地は決まるが、助走速度と空中姿勢が不十分な跳躍を教師が見せた。それにより、記録を伸ばすためには、着地より前の局面である助走から踏み切りのつながりが大切であることに気付かせ、解決の見通しをもたせたのである【ゴール達成の見通し：関目的指向性】。

子どもの姿

T：チームの得点が伸びなかった1番の原因は何だったかな。

C7：「くの字」を意識し過ぎて、尻もちをつけて点が伸びませんでした。

T：尻もちで着地したら、得点が伸びないよね。今日は着地の練習をしますか。（助走・踏み切りが不十分な跳躍を教師が跳んで見せる。）

C8：でも、ピタッと止まることだけを考えていたら記録は伸びないよ。

C9：きっと助走から踏み切りの練習をしっかりとの方が、記録が伸びると思う。



このように、着地より前の局面に子どもたちの意識を焦点化し、「助走と踏み切りの練習をしよう」という学習課題を設定したのである。その後、手元にある連続写真で気付いた課題や、前時に書いた付箋を基に、自己の課題に応じた場を選んで練習していった。その際には、教師から「ペアになりましょう。」と言われなくても、自己の課題解決に向けて自分から進んで友達に声をかけ、アドバイスし合う姿が見られた。



【別のチームの友達に助言】

（5）考察

単元の中にチームで競い合う場を複数回設けたことで、子どもたちは自己の課題解決を繰り返すことができ、次第に自分たちで解決したいことを見いだしていけるようになった。その際、チーム戦の得点や連続写真等、考えるための情報が十分にあったことも、子どもたちの意欲を維持できた一つの要因だと考える。休み時間にチームで集まって秘密特訓ノートに練習計画を立てたり、家庭学習において陸上運動の練習方法を調べたりしてくる子どもの姿が見られた。

一方で、自己の課題を捉えていても、子ども自身が課題解決に必要な練習の方法や練習の効果を十分に理解していない場合があった。今後、課題解決に向けた手立てとそのよさを理解させる働きかけを行い、子どもたちの追究意欲を適切に課題解決に向かえるようにしていきたい。